

島のむんがたり

電灯がともった!

みなさんは徳之島に初めて電灯がともったのがいつごろかご存じですか。

昔、電気がなかったころは、明かりといえば石油ランプか豚の油を使ったランプくらいしかありませんでした。でもランプはすぐにススだらけになるし、お金もかかりました。ですから、

夜の仕事はなるべく満月前後の月明かりを利用するようにしていました。ふだんは早寝早起きするしかなかったのです。

大正8年のことです。大日本工業株式会社という会社が、秋利神川に水力発電所を造ろうと水路工事を行ったことがありました。でもこの時は、なぜか百

かったそうです。

大正12年9月13日、この日送電が開始されることを知った亀津の人々は、大瀬橋の周りに集まって電灯がつくのを待っていました。そして電灯がともると一瞬どよめきが起こって、その日は夜遅くまで橋の周りでお祭り騒ぎとなったと伝えられています。

しかし最大出力は120kw

でしたから、大変弱々しい電力でした。現在は、単身世帯でさえ平均6・1kw/日も消費しています。これを全島の2621戸に配電したのですから、裸電球1つ点けるのが精

える時間が決まっていましたので、各集落に電気のスイッチ盤を管理するお店などがあって、夕方に電源を入れ、朝スイッチを切っていたそうです。そのころの電線は裸線で、茅草などの屋根に引き込まれていたため、雨が降るとビリビリと感電することがあったといえます。停電も多かったそうです。今では想像もできませんね。

この文章はクーラーの効いた明るい部屋で書いています。BGMが流れ、よく冷えた飲み物も置いてあります。今、改めて電気のありがたさを実感しているところです。

(町誌編さん室 米田博久)

問 郷土資料館
☎0997-82-2908



亀津町役場から北区方向

川に豊富な水力を利用して、125kwの発電機を据え付けたのです。同時に、平土野から花徳を経て亀津までの送電網を引きました。驚くべきことに、大徳水電工業は貧しい人からは電気代を取らず、代わりに芋をいくらか納めるだけでよ

うと有志に呼びかけて、大徳水電工業株式会社を設立しました。その翌年、河口付近に発電所を完成させ、川の豊富な水力を利用して、125kwの発電機を据え付けたのです。同時に、平土野から花徳を経て亀津までの送電網を引きました。驚くべきことに、大徳水電工業は貧しい人からは電気代を取らず、代わりに芋

をいくらか納めるだけでよ

【註】浅松氏は、浅間出身で徳之島初の工学士として藤山コンツェルン傘下の企業で技師長を務め、さらに小田原電気鐵道(株)専務取締役にたくさん多く

の会社で役員を務めた方です。